京都2012

イノベーションへの挑戦

日本の経済は東日本大震災からの復興や消費の一部持ち直しなどで明るい兆しがみえつつある。とはいえ、欧州の財政危機や世界的な原料価格の高騰・調達不安など、一つのきっかけで崩れる弱さを抱えている。国内を代表する電機メーカーが次々と経営悪化に陥った姿も、国際的な競争力低下の現実をまざまざと見せつけた。こうした中、京都のモノづくり企業はニッチ（すき間）の市場が中心ながら、世界をリードする強さを保っている事例が多い。従来の事業モデルから脱しモノづくり立国を再生する手がかりを、そこから見いだせるのか。京都工業会の服部重彦会長（島津製作所会長）に、強さの理由を聞いた。

京都の企業、なぜ強い？

□―2011年11月に京都工業会はマレーシアとインドネシアを視察しました。新興国の代表的な地域で、どのような印象を受けましたか。

「交通渋滞の対策をはじめインフラ整備はまだ足りないが、人口が多くエネルギーを感じた。親日的で、両国には京都のGSユアサやニチコンなどが進出している。訪れた日系の工場はどこも現地の従業員と良好な関係を築き、人手も使ってうまく生産していた。両国の高成長をみると、自動車産業をはじめ両国への進出は避けられないだろう。これまで進出先の中心だった中国はコストが高まり、企業経営には難しい問題が増えている」

―中国一辺倒からの変化が起きている中で、京都の企業は早くから新興国で独自に事業展開するケースが目立ちます。

「例えば日本電産やオムロンはベトナムで量産し、強いコスト競争力を築いている。村田製作所もフィリピンでの生産を決めた。グローバル化に選択の余地はなく、生産や研究開発の海外移転をネガティブにとらえてはいけない。海外からは事業に伴う収益のリターンをきっちりと確保し、国内では一段と高レベルな製品の技術開発や生産にシフトする必要がある。米国のアップルはマーケティング戦略で成功したといわれる。日本の企業も新たなビジネスモデルづくりが求められる」

―モノづくりに優れるだけでは、日本の企業は勝てなくなりました。

「確かに日本製の品質や機能は優れているが、同じ設備から造られるものでは差をつけにくくなっている。テレビは薄型化や豊富な機能で先行しながら、生産規模で韓国にやられてしまった。グローバルな市場の急速なニーズの変化に、追いつけなくなったのかも知れない。例えば島津製作所が競合する米国の計測機器メーカーも、製品回りのソフトや技術サービスで差別化し、高い収益力を築いている。こうした収益モデルは先進国で強く、島津には強敵だ」

期待できる中堅も育っている…と服部会長

―京都の企業には、日本のモノづくりが再生するヒントはありますか。

「電子デバイスでは村田製作所やロームなどが依然として強い。村田製作所はセラミックスの焼成から一貫してオリジナルの設備と技術でコンデンサーを製造している。ロームのカスタムLSI（大規模集積回路）も同様で、いずれも技術のブラックボックス化に成功した。テレビも当初は日本メーカーがブラックボックス化を図ったが、結局は生産設備が同じになってしまい、海外でも安く造れるようになってしまったのではないか」

―そのような事例からは、ニッチの市場で強みを磨いてきた京都の企業像が浮かんできます。

「日本電産はモーターに集中し、M&A（合併・買収）で技術を囲い込み規模も拡大してきた。特定の技術や市場の深掘りで独走している。島津も大手の電機メーカーと比べれば規模こそ小さいが、計測機器では大手が参入しないニッチ市場を世界で握っている」

―電子デバイスをはじめ、世界で飛躍する企業を輩出してきた京都でも、後に続く企業が現れていないとの指摘がされています。

「確かにここ20年くらいは目立たない。ハングリー精神の経営者の時代が終わり、これから年間売上高が数千億円以上に成長する新たな企業が生まれることは、難しいかも知れない。だが、日本写真印刷やアークレイなど期待できる中堅も育っている。独自技術で特定の市場に強い中小メーカーも100社から150社はある。こうした次の企業を伸ばすサポート体制を、早急に整えなければならない」

特定の技と市場深掘り

□―製造業が競争力を回復するための公的な支援は、どのように改めるべきだと考えますか。

「世界的な大競争に突入しているのに、国家レベルでは依然として省庁同士が縄張り争いし、ばらばらな支援にとどまっている。一体的な戦略を立てて、めりはりある支援が必要になる。新たな産業を伸ばすには大企業より、優れた独自技術を持つ中小企業をサポートするべきだ。自治体のレベルでも、技術開発の助成が低い割合にとどまったり、手続きが煩雑で敬遠されたりする場合が多い。迅速でスムーズな支援の仕組みづくりが望まれている」

―企業サイドに求められる姿勢は。

「特に中小企業は他社と異なる領域でどれだけ技術を深掘りできるかが成長のカギを握る。それは大手も同じで、基盤技術をしっかりと育てていないと、新しいビジネスは創造できない。島津も創業から130年以上たつが、市場の変化で危機に何度も襲われた。しかし、そのたびに基盤技術から技術革新を生み出してきたため、乗り越えることができた。危機を経験しないと、企業も人も次にステップできない」

―グローバルな人材育成も進みそうですか。

「人材も特定の分野にずっと張り付けていると大きな環境の変化を経験できず、成長が止まる。海外での経験は、それまでの自己を否定して大きく育つよいチャンスだ。島津も若手の海外研修を始めたところ、希望や予定の40人のうち半数は女性が占めた。女性を中心に海外に意欲的な若手が多く、心強く感じた。研修者は試験よりも人物本位で選び、1―2年間海外拠点で修業させる」

―12年に京都工業会が計画する主な事業は。

「グローバル化の取り組みは引き続き重視したい。恒例の海外産業視察では、航空産業が盛んなカナダや米国東部のボストンなどを考えている。当地で成功しているとされる産学官連携などの方式を学びたい」

京都工業会会長 服部 重彦氏に聞く

◇京都ビジネス交流フェア2012◇

会場、熱気に満ちる

京都府と京都産業21が開催

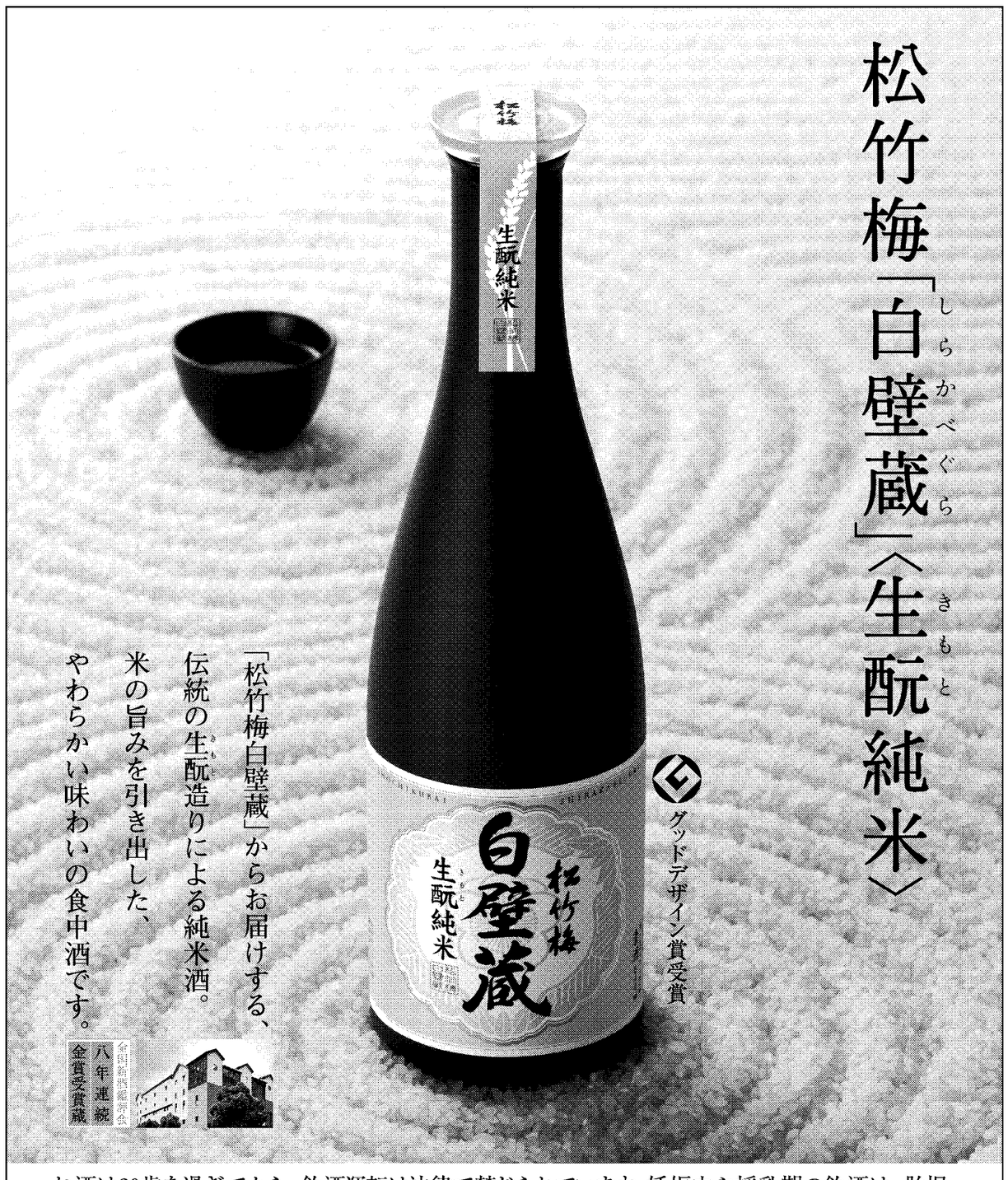
京都府と京都産業21は2月23日、24日の両日、京都パルスプラザ（京都市伏見区）で京都最大規模のビジネスイベント「京都ビジネス交流フェア2012」を開いた。中小企業126社・15グループが出展する「ものづくり加工技術展」のほか、1464件の商談が実施された近畿・四国10府県の中小と大手メーカー・商社などの面談方式による商談会などで会場は熱気で満ちていた。

技術開発で成果を上げた中小企業を顕彰する2011年度の「京都中小企業技術大賞」では、技術大賞をクロスエフェクト（京都市伏見区）が「軟質素材の心臓モデル」で受賞し、表彰された。そのほかコスメディ製薬（京都市南区）、最上インクス（同右京区）、内外特殊エンジ（同南区）、ナベル（同南区）、西村製作所（同南区）、ボンドテック（宇治市）が優秀技術賞を受賞した。

京都産業21の財団設立10周年を記念した「京都ビジネス交流フェア記念フォーラム」も開催。新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）の高倉秀和スマートコミュニティ部長が「NEDOにおける蓄電技術開発の方向性について」と題して基調講演を行った。さらに元三洋エナジー貝塚社長で技術研究組合リチウムイオン電池材料評価研究センターの田中俊研究マネージャーが「リチウムイオン電池の使用部材から製造まで―工場現場の紹介―」と題して講演した。将来有望な蓄電池に関心のある受講者が熱心に聞き入っていた。

会期中の来場者は過去最大の8500人。多くの中小はこの交流フェアでビジネスチャンスをつかもうと意欲的で、今回のイベントの担う役割も大きい。

「京都ビジネス交流フェア2012」の会場



お酒は20歳を過ぎてから。飲酒運転は法律で禁じられています。妊娠中や授乳期の飲酒は、胎児・乳児の発育に悪影響を与えるおそれがあります。飲酒は適量を。のんだあとはリサイクル。
www.takarashuzo.co.jp　宝酒造株式会社

ISHIDA

創造の先に世界品質

イシダは計量技術を通じて、
世の中に必要とされる存在、“WORLD BRAND”を目指します。

計量・包装・検査システム
株式会社イシダ
京都市左京区聖護院山王町44番地
http://www.ishida.co.jp